

虐待を受けた少年の 変わる様子絵本に

支援団体所長がつづる

踏まれて変形した耳を隠すため、顔を包むように髪を伸ばしていた――。家族から虐待を受けた少年が、周囲との交流を通して変わる様子を描いた詩集絵本「耳と髪のはなし」が出版された。児童養護施設の退

所者らを支援する、国分寺市のアフターケア相談所「ゆずりは」所長の高橋亜美さん(47)がつづった。

詩集は、高橋さんが10年ほど前、関東地方の自立援助ホームで働いていた時に出会った15歳の少年「コ



詩集絵本「耳と髪のはなし」をつづった高橋亜美さん＝都内

ウ」のエピソードを描いた内容。コウは中学を卒業したばかりで、黒髪を肩まで伸ばしていた。同居のおじに寝ている間に踏みつけられ、左耳が変形していた。

ホームで同じ経験を持つ仲間と出会い、接する中で、無口なコウの表情が少しずつ明るくなり、言葉も増えていった。

ある日、コウの髪の色が変わっていた。

――コウの髪の色はきれいにカットされていた「かっこいいよ」

職員が言うと、コウは照れた。



「虐待を受けた子どもたちは、自分自身を責め、存在を隠そうとしてしまう」と高橋さん。毎日、コウを職場の印刷工場に送り届けた。働いて給料をもらい、

この出来事に、高橋さんは「暴力や支配で縛り付けられた自分を解放できたのだと思う」と振り返る。詩集を通じて、「虐待を受ける子どもたちを知るきっかけになればいい」という。詩集絵本は500円(税別)。

収益は施設を出た子どもたちを支援する基金に寄付される。問い合わせは百年書房(03・6666・9594)。

「耳と髪のはなし」の一部

コウは顔の輪郭をすっぽり包みこむような長髪だった

(加藤あす佐)